

教材・教具の紹介

小集団学習場面における特別な教育的ニーズのある児童の
他者との係わりの変化を促すための支援課題（その3）

石田 脩介*・山下 拓也**・棟方 智美**・高井 透**・楠 淳**・池田 吉史***・大庭 重治***

1 問題

特別な教育的ニーズのある児童が主体的に学習を進めるためには、支援者や他児との良好なコミュニケーションの獲得が期待される。そのためには、小集団学習場面を活用することが望ましい（大庭・葉石・八島・山本・菅野・長谷川，2012）。小集団学習場面の最大の特徴は、特別な教育的ニーズのある児童と周囲を結ぶ仲介者を配置する点にある。この仲介者の存在により、児童たちは円滑なコミュニケーションを観察、体験することができる。こうした小集団学習場面における支援課題として、情報統合型課題を取り上げ、課題の開発及び実践が試みられている（石田・川住・植村・大庭・池田・八島，2015；石田・植村・小出・大庭・池田・八島，2016）。情報統合型課題とは、集団の成員が各自所有する情報を持ち寄って解決するタイプの課題である（仮屋園・丸野・加藤，2000）。この課題の特徴は、情報カードを各成員に分配するため、全員が議論に参加し、情報を出し合ってはじめて課題が遂行される点である。ただし、小集団学習場面において、このような情報統合型課題を用いることで、児童たちの係わりに変化は見られたが、一方で下級生は情報の単なる提供に留まりがちであった。また、活動における方略が洗練されることにより、かかわり自体が少なくなる傾向も観察された。

そこで、本研究では、情報統合型課題と特性の異なる意見集約型課題に着目した。意見集約型課題とは、正答のない課題について、議論をしながら集団としての意見を決めていくタイプの課題である。仮屋園・丸野・加藤（2000）を参考にして、情報統合型課題と意見集約型課題の違いを表1に示す。

2 目的

意見集約型課題の遂行過程における児童間の係わりを検討することで、特別な教育的ニーズのある児童の他者との係わりの変化を促すための課題内容と、意見集約型課題の活用方法を検討することを目的とした。

3 方法

1) 対象児

読み書き・算数・コミュニケーションに対する特別な教育的ニーズの訴えがあった小学校に在籍する2～6年生の児童16名（男子8名、女子8名）を対象とした。

2) 分析対象

約75分の学習場面のうちの後半活動を対象とした。期間は、20XX年5月から9月にかけての10回であった。

3) 支援場面

大庭ら（2012）を参考にして主指導者MT（Main Teacher）と補助指導者ST（Sub Teacher）4名が関与する小集団学習場面を設定した。

4) 支援課題

意見集約型課題をベースに作成したすごろく課題（「すごろくえすと」）を実施した。課題内容は、主人公（コマ）の能力（体力、攻撃力、素早さ、優しさ、回復力）を班で相談して決め、モンスターなどが配置されたすごろくに挑戦するというものであった。第1回で使用したすごろくマップを図1に示す。第1回から第3回目までは、意見集約型課題であり、第4回からは情報カード（図2）を導入することで、情報統合型課題の要素を盛り込んだ。また、第8回目からは、能力などが有利になるアイテムを決まった金額まで購入できる買い物の場面を導入した。「すごろくえすと」における課題の変更内容を表2に示す。

4 結果と考察

第1回から、非常に意欲的に活動に取り組んでいる様子がうかがえた。しかし、第2回、第3回と継続していくうちに、上級生や、発言力の高い児童が他の児童を説得し、周りではそれを見ているだけになりがちであった。これは、表1に記載した意見集約型課題に見られる特徴（特に、①②③④）が影響を及ぼしたためであると考えられた。そこで、それを解決するために、第4回からは、情報カードを導入した。情報カードを導入したことによって、他者の意見を聞かなければ、マップにどのようなマスが配置されているかわからないため、他者の意見に耳を傾ける必要があった。この変更によって、下級生の発言数の増加が見られるとともに、聞き手も耳を傾けている様子が見られた。また、宝箱の中身の決定や買い物の場面に、下級生が参加しやすいルールを導入したことで、積極的に参加できるようになった。さらに、これまで他者の意見に耳を傾けず、自分の意見を通そうとしていた上級生においては、他者の意見についての感想を募ったり、それぞれの意見の良い点と問題点を挙げたうえで、どのようにするかを班で相談したりすることができるようになった。

これらの課題遂行の変化から、特別な教育的ニーズのある児童の他者との係わりの変化を促すためには、意見集約型課題のような開かれた解答に向けての議論の場面を設定しつつ、情報統合型課題のような各成員の役割を明確にしていく工夫が必要であると考えられた。

* 兵庫教育大学大学院連合学校教育学研究科学校教育実践学専攻

** 上越教育大学大学院学校教育研究科特別支援教育コース

*** 上越教育大学臨床・健康教育学系

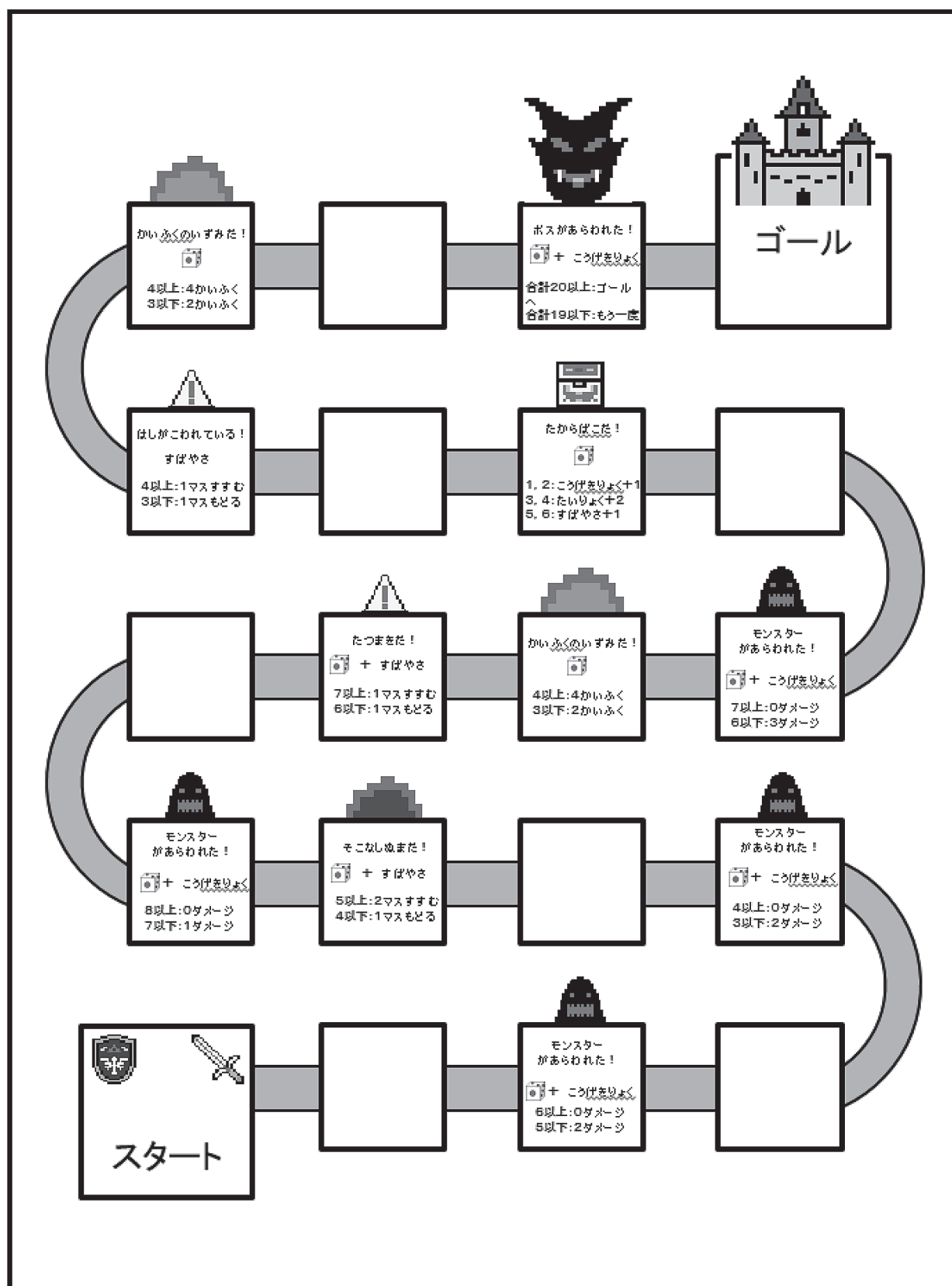


図1 第1回で使したすごろくマップ

「すごろくマップ」を用いて、すごろくに挑戦した。第1回から第3回までは「すごろくマップ」を見ながら主人公の能力を相談して決めた。

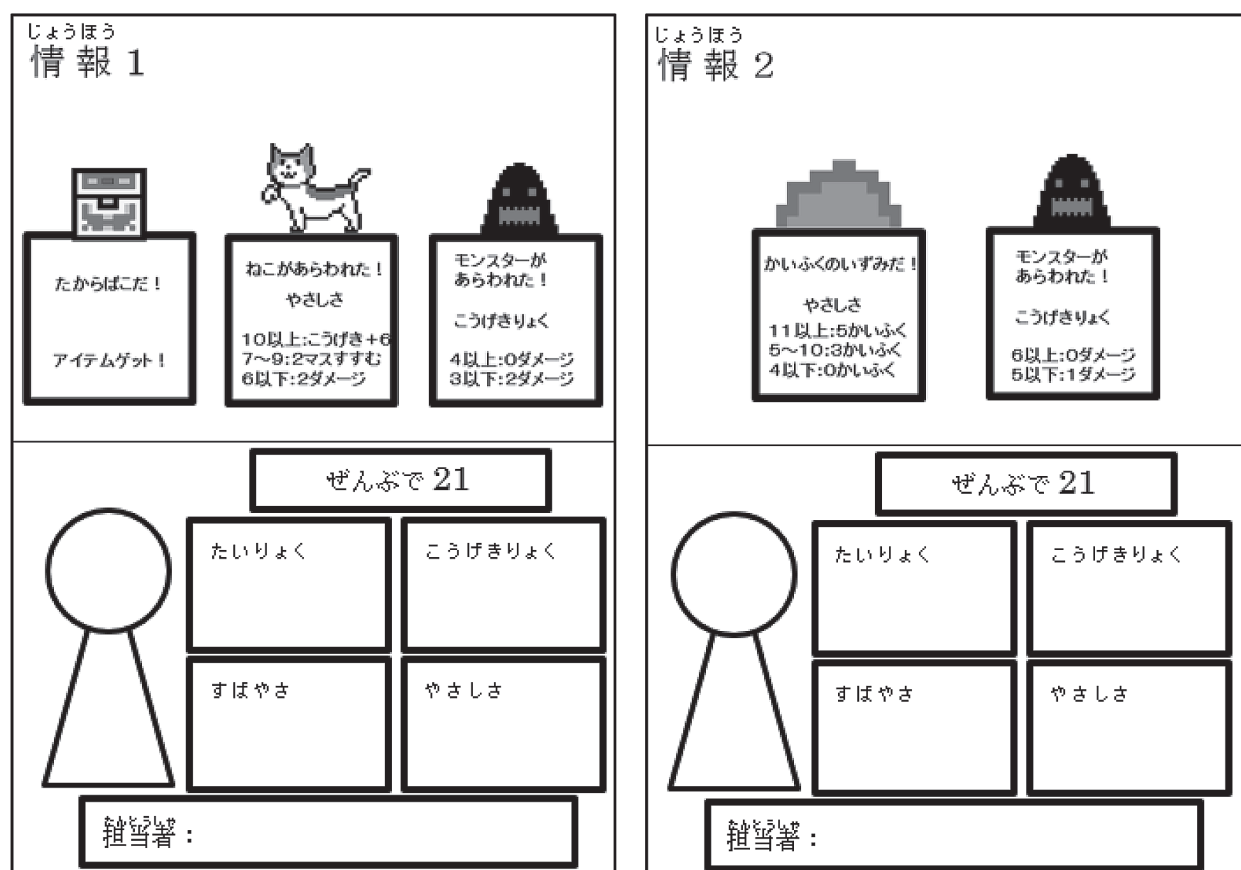


図2 第4回で使用した情報カード

第4回から「すごろくマップ」の提示をやめ、主人公の能力を情報カードの情報を交換することで決めるように教示した。情報カードは互いに内容も伝えてよいが、バディ以外には見せないというルールであった。上段にはすごろくマップに配置されているマスの情報、下段には主人公の能力を自分で考えて割り振ったものを記入する欄を設けた。

表1 情報統合型課題と意見集約型課題の違い（仮屋園・丸野・加藤，2000）

	情報統合型課題	意見集約型課題
①成員の参加の程度	各成員がかならず参加しないと議論は停滞する	参加しない成員がいても議論は進展する
②成員の協力の程度	一定方向への全成員の一致協力が必要	一定の方向への全成員の協力は不必要
③達成目標の明確性	達成目標は明確	達成目標は不明瞭
④成員に認知される討論の方向性の明瞭さ	成員に明確に認知されやすい	成員に明確に認知されにくい
⑤提出される意見の多様さ	少ない	多い
⑥議論体験によって学ばれる内容の多様さ	明確（協同作業の進め方）	不明瞭（多岐にわたる）
⑦リーダーの役割の明確さと大きさ	明確で大きい	不明瞭
⑧思考の広がり	狭い	広い
⑨成員の情動面での起伏	少ない	大きい
⑩終了時の連帯感	大きい	少ない
⑪自分の意見のまとめやすさ	まとめやすい	まとめにくい
⑫各自の立場の明確化の必要性	必要性は低い	必要性は高い
⑬話し方の技術	必要性は低い	必要性は高い
⑭資料・データをみる眼	必要性は高い	必要性は低い
⑮事実と意見の区別の困難度	困難度は低い	困難度は高い

表2 「すごろくえすと」における課題の変更内容

実施回	課題内容（変更点）	目標 ¹⁾	能力の種類 ²⁾	数値 ³⁾
第1回	すごろくのマップを見ながら、班で能力の割り振りを行う。マップはスタートとゴールを含め、20マスであった。	ボス突破	体、攻、素	10
第2回	変更無し	ボス撃破	体、攻、素、優	15
第3回	宝箱に入れる宝を決める場面を設定した。2年生アイテムと、3年生アイテムを6種類ずつ提示し、2年生アイテムは2年生が、3年生アイテムは3年生が中心になって決めるというルールを設定した。	MTに勝利	体、攻、素、優	21
第4回	情報カードを導入。宝箱の中身を6つの中から3つ2年生が中心に決定するというルールに変更した。情報カードに能力の振り分け記入、宝の中身を決定、班での能力の割り振りの決定という順序に設定した。	ボス撃破	体、攻、素、優	21
第5回	情報カードの分担をあらかじめ決定しておくように変更した。また、宝箱の中身を9つの中から3つ選ぶように変更した。	ボス撃破	体、攻、素、優	30
第6回	情報カードに能力の割り振りを記入する場面での相談を禁止とした。	ボス撃破	体、攻、素、回	30
第7回	マップを28マスに変更した。	MTに勝利	体、攻、素、回	30
第8回	宝箱の中身を定める場面を削除し、買い物をする場面を導入した。お金は2年生に\$100札(3枚)、3年生に\$50札(4枚)を割り振った。買うアイテムは班で相談して決定した。	ボス撃破	体、攻、素、回	30
第9回	変更無し	ボス撃破	体、攻、素、回	30
第10回	変更無し	MTに勝利	体、攻、素、回	35

- 1) すごろくにおける達成目標として、ボス突破と、MTに勝利を設定した。ボス突破は、ゴール手前に配置されたボスのマスを突破し、ゴールのマ스에到達することであった。MTに勝利は、MTより先にゴールマ스에到達することであった。
- 2) 能力は第1回で3種類、第2回以降で2種類設定した。体は体力、攻は攻撃力、素は素早さ、優は優しさ、回は回復力であった。体力が0になると3マス戻され、攻撃力が低いとモンスターからダメージを受け、素早さが高いと進むマスが多くなり、優しさ及び回復力が高いと体力が多く回復する。
- 3) 主人公の能力は、数値の数字をそれぞれの能力に振り分け、決定した。等分できない数値を設定することで、必ず能力間に差が生じる状況にし、議論の必要性を高めた。

付 記

本研究の内容は、上越教育大学特別支援教育実践研究センター主催「第4回特別支援教育実践研究発表会」においてポスター発表により公表した。また、研究の一部は、上越教育大学研究プロジェクト（一般研究）による助成を受けた。

文 献

石田脩介・川住文博・植村祥子・大庭重治・池田吉史・八島猛（2015）小集団学習場面における特別な教育的ニーズのある児童の他者との係わりの変化を促すための支援課題. 上越教育大学特別支援教育実践研究センター紀要, 21, 63-64.

石田脩介・植村祥子・小出芽以・大庭重治・池田吉史・八島猛（2016）小集団学習場面における特別な教育的ニーズのある児童の他者との係わりの変化を促すための支援課題（その2）. 上越教育大学特別支援教育実践研究センター紀要, 22, 59-60.

仮屋園明彦・丸野俊一・加藤和生（2000）情報統合型議論過程の解的研究. 鹿児島大学教育学部研究紀要, 52, 227-257.

大庭重治・葉石光一・八島猛・山本詩織・菅野泉・長谷川桂（2012）小集団を活用した特別な教育的ニーズのある子どもへの学習支援. 上越教育大学特別支援教育実践研究センター紀要, 18, 29-34.